

Ⅵ. 国際的な取り組み

第1章

附属学校国際化

三小田 博昭

第1節 概要

26年度、本校は文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）アソシエイト校としての指定を受けた。スーパーグローバルハイスクール（SGH）の目的は、「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する（文部科学省）」ことである。その目的を遂行するにあたって「国際化を進める国内の大学のほか、企業、国際機関と連携して、グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材の育成に取り組む高等学校等を「スーパーグローバルハイスクール」に指定し、質の高いカリキュラムを開発・実践する（文部科学省）」とある。

SGHアソシエイト校としての本校の研究課題は「グローバル大学と一体化した中高一貫校での世界的リー

ダー育成」であり、「世界に通用する「グローバル・リテラシー」を身につけたリーダーを、グローバル大学である名古屋大学と一体となって、中高大10年間接続した教育の中で育成する。本研究では、これまでの国際化の取り組みをもとにして、教育課程、教育方法を大学と協同で開発し、海外において発展的な実践を行うこと」がその目的である。

平成26年に名古屋大学もスーパーグローバル大学（SGU）に採択された。名古屋大学総長が策定した濱口プランには「名古屋大学からNAGOYA UNIVERSITYへ」という大きな目標が掲げられている。名古屋大学が附属学校に課しているミッションの1つに「附属学校の国際化」がある。平成26年度は、スーパーグローバルハイスクール（SGH）アソシエイトとスーパーグローバル大学（SGU）が連携し、海外から多くの高校生（一部大学生）や外国人教員を多く受け入れてきた。以下の表は平成26年度に本校が受け入れた外国人高校生と外国人教員の一覧である。

(平成26年度の実績)

時期	国名	外国人生徒（学生）数	外国人教員数	関係機関等
5月	台湾	16名	14名	名古屋大学国際部
6月	モンゴル		2名	新モンゴル高等学校
7月	アメリカ 韓国 モンゴル	5名 16名 10名	6名 2名 1名	名古屋大学 コンベンションビューロー 新モンゴル高等学校
10月	タイ インドネシア・マレーシア	23名	2名 6名	JICE JENESYS2.0 名古屋大学教育学部
11月	ホンジュラス等 シンガポール インドネシア アメリカ	13名	5名 3名 25名 2名	名古屋大学 JICE JENESYS2.0 名古屋大学 名古屋大学
12月	オーストラリア等	13名	—	A F S
1月	モンゴル		13名	名古屋大学教育学部
3月	アメリカ	10名	3名	S S H

第2節 26年度の成果と課題

25年度に続き、26年度も世界各地から多くの外国人生徒・外国人教員を受け入れた。特に26年度は総数200名近くにまで登った。今年度は11月に名古屋で「国連ESDの10年」世界閣僚級会合が開かれたため、文部大臣クラスのゲストが本校を訪問されたことが特徴的であった。本校の高校生もホンジュラス教育大臣、ミャンマー教育副大臣、ネパール教育大臣らと話し合いをもつ機会に恵まれ、大きな刺激を受けていた。また、生徒の中には外国からの高校生を各家庭にホストファミリーとして受け入れ、家庭においても外国人生徒と積極的に交流をはかった。また、受け入れを行っている以外にも、附属高校生を中心に毎年、長期留学に出かける生徒も多い。

海外から多くの高校生を受け入れているには大きな理由がある。SSH研究として毎年、米国へ生徒を派遣しているが、その数はせいぜい10名程度である。引率教員も2名である。360名の生徒がいるため、その割合は数%でしかない。多くの高校生が、海外の高校生と交流を経験することが理想ではあるが、金銭的・物理的・時間的に困難である。そのため、発想の転換が必要であった。つまり海外の高校生を本校に招くことにより、多くの高校生が、海外の同世代の高校生と交流できるのである。それも年間を通して世界各国の高校生と。この試みは非

常に効果的である。本校では、受け入れた海外の高校生と文化交流だけでなく、実際に同じ課題を授業中に解いてみたり、協同でワークをやってみたりする活動をしている。これにより、文化的・学問的な交流が可能になるのである。

第3節 海外の高校との取り組み

本校では現在、海外の2カ国の5つの高等学校と交流を行っている。

- 1) BARD HIGH SCHOOL EARLY COLLEGE (米国)
- 2) 新モンゴル高等学校 (モンゴル国)
- 3) カーボロ高等学校 (米国)
- 4) チャペルヒル高等学校 (米国)
- 5) イーストチャペルヒル高等学校 (米国)

米国のBARD HIGH SCHOOL EARLY COLLEGEは本校が取り組んでいるスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の活動（SSH米国ニューヨーク海外研修）の一環として交流を平成23年度から行っている。この交流の目的は本校とBHSECが協同で行っているJoint Science Projectについて、米国の研究機関及び現地の教育機関と研究成果交換会を行うことである。この目的は、日頃行っている生徒の研究成果を同世代のアメリカの高校生に英語でのプレゼンテーションやディスカッションを行うことにより、研究内容の質を向上させ、生徒の国際的な科学力を高めることである。また、米国滞在中は、すべて米国人高校生宅にホームステイを基本としている。ホームステイを通して、米国人の文化的・社会的・宗教的背景を体得し、米国人の思考方法や思考過程、価値観の根底にある風土を学ぶことができるからである。



(3カ国教育大臣らの附属学校訪問の様子)





(SSH米国ニューヨーク海外研修の様子)

新モンゴル高等学校(モンゴル国)は、本校と平成25年に姉妹校の協定を結んだ。スーパーグローバルハイスクール(SGH)アソシエイト校としての研究連携校でもある。ASPの地球市民学を受講している生徒のうち、希望者を募ってGlobal Committeeを結成し、新モンゴル高等学校との交流を行っている。活動期間は1年間を基本単位とし毎年9月から新モンゴル高等学校とのTV会議を開始し活動を始める。Global Committeeのメンバーの中の希望者が実際に夏期休暇期間にモンゴルを訪問する。平成26年度は、モンゴルの環境問題に焦点を当て、モンゴルのダチンチレン村とサンサル村で環境調査を行った。具体的には、村内に散在するゴミの種類や散乱状況を観察調査し、現地の大人や子どもたちの持っている環境意識について聞き取り調査を行った。その結果をJICAモンゴル事務所やモンゴル日本大使館で報告し、それぞれの職員の方から助言をいただいた。



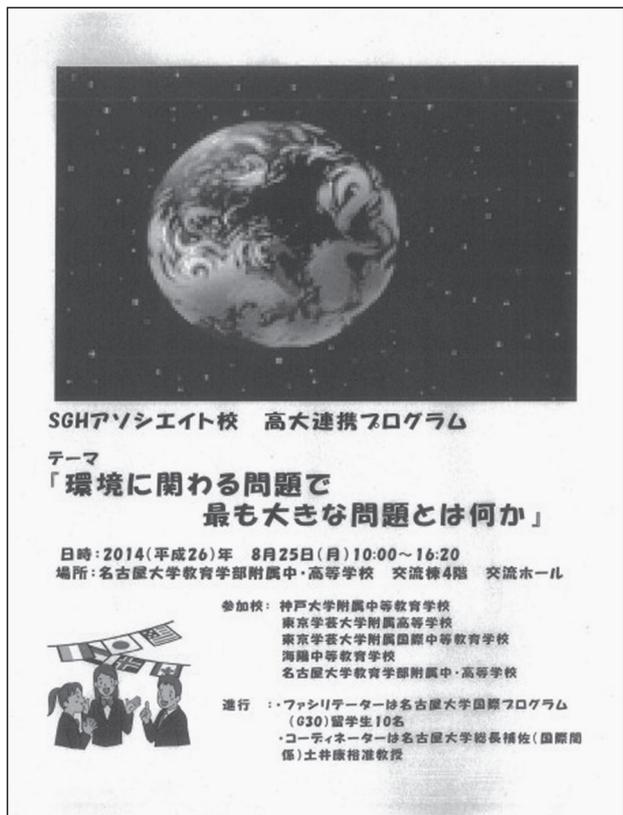
カーボロ高等学校、チャペルヒル高等学校、イーストチャペルヒル高等学校(米国)ともスーパーグローバルハイスクール(SGH)アソシエイト校としての研究連携校でもある。この3校はともにノースカロライナ州にあり、Duke University, University of North Carolina at Chapel Hill, North Carolina State Universityに囲まれておりResearch Triangleとしても有名な地域にある高等学校である。全期間ホームステイを行い、現地の3校に地元の生徒と一緒に通学し授業を受ける。その中で、日本文化の紹介やスピーチを行い、Worldwideな支店からパワーポイントを使ったプレゼンテーションの方法やスピーチの方法を学ぶ。この活動は帰国後においても生徒のプレゼンスキルとして活かされる。



第3節 Global Discussion

今年度、本校が、名古屋大学と連携して初めて夏季休暇を利用して8月に名古屋大学で行ったイベントである。海陽学園中等教育学校、神戸大学附属中等教育学校、東京学芸大学附属高等学校、東京学芸附属国際中等教育学校が参加した。目的は、「社会のグローバル化が進む中、日本国内でも中等・高等教育の急激な国際化が求められている。将来、高校と大学が連携して行うことができる国際的な人材育成教育(高校3年+大学4年)」である。名古屋大学のG30国際プログラム群に参加している留学生11名を議論のリード役とし、すべての議論が英語で行われた。テーマは「環境に関わる問題で最も大きな問題とは何か」についてである。その成果が評価され「都道府県・指定都市教育委員会 指導主事通信Vol.

153」に掲載された。



以下は参加した生徒の感想である。

・今回のディスカッションで僕は自分の力のなさを痛感しました。自校の目標であるリーダーを育てるところのリーダーシップも異なる言語の中では全く通用しなかったため、勝負の土俵にも立てなかったというのが正直な感想です。

・今回の国際化プロジェクトは私に主に2つのことを考えさせ学ばせるきっかけとなるものだった。一つ目は自分の内面に関してである。私はもともと人見知りな激しい性格で、なかなか初対面の人と打ち解けるのに時間がかかるタイプの人間だ。また、英語に関してもなかなか使う機会がないこともあり、うまく自分の思っていることを表現できないことが多くあった。しかし、今回のプログラム中に先生が「最終系が英語であればいい。大事なものは中身の議論を充実させることであって形式(英語)にこだわるんじゃない。楽しんで。」という言葉で少しずつ柔らかくなり最後にはある程度しっかりした議論ができるようになっていく自分に気づいた。この経験を生かし、少しずつ人と話すことへのバリアをなくしていければと思う。二つ目は議論の内容に関してである。今回は「環境問題における最も大きな問題は何か」というものだった。話し合いをする前、私は「こんな漠然としたテーマで話し合ったところでたして何になるのか」と今一つわからずにやっていた。しかし、実際に

議論をしてみるとその過程で「漠然としたもの」と「具体化したもの」が複雑に絡み合い、グループとしての結論というよりその過程における議論・お互いの考え方の解きほぐしというもので確かな効果をもたらしていることが分かった。もちろん、今回のこの議論が私のためになったということもだが、これから何か話し合いを企画などしていくときに必ず「答え」にこだわるのではなく、あえてテーマの輪郭をぼかすことで互いに対する理解を深めていくというやり方もあるのだと知った。

第4節 ユネスコスクールとしての活動

本校は22年7月に名古屋市内で初めてのユネスコスクールとして認定された。愛知県では、特に平成26年度は「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」が名古屋で開催された。それにあわせ県内ではさまざまなイベントがプレ企画として行われたが、附属学校生徒も「平成26年度 ESD子どもフォーラム」に参加し、県内から集まった多くの中学生・高校生と交流を持った。附属学校が、中心となって行っているユネスコスクールとしての活動に「高等学校ESDコンソーシアムin愛知」がある。例年1日で行っているのであるが、今年度は名古屋大学豊田講堂を会場に2日間わたって開催した。内容は以下のとおりである。

- 1 日時 2014(平成26)11月2日(日)・3日(月・祝)
第1日目 9:30~16:00
第2日目 9:30~16:30
- 2 会場 名古屋大学 豊田講堂ホール・アナトリウム・シンポジオン
- 3 日程
1日目(11月2日(日))

9:00	9:30-9:45	11:00	12:00	13:00	16:00	
受付	各校活動紹介 発表 【ホール】	ポスター セッション 【アナトリウム】	昼 食	高校生ESD ワークショップ第1部 【シンポジオン】		解散

2日目(11月3日(月・祝))

9:00	9:30	11:00	12:30	13:30	16:00	16:30
受付	高校生ESD ワークショップ第2部 【シンポジオン】	昼 食	高校生ESD ワークショップ第3部 【ホール】	高 評		片付け

4 発表校

愛知県立熱田高等学校、金城学院高等学校、愛知県立千種高等学校、愛知県立豊田東高等学校、中部大学第一高等学校、春日丘高等学校、名古屋大学教育学部附属中・高等学校、愛知県立南陽高等学校

5 主催 高等学校ESD愛知コンソーシアム実行委員会／中部ESD拠点協議会
 共催 名古屋大学大学院教育発達研究科・教育学部／名古屋大学大学院環境学研究科
 後援 愛知県教育委員会
 連携協力 ESDユネスコ世界会議あいち・なごや

支援実行委員会／環境省中部環境パートナーシップオフィス

この2日間で話しあった内容を、11月11日(火)、12日(水)に行われた併催イベントESD交流セミナーで生徒が発表した。

「高校生ESD コンソーシアムIN愛知」

2014年11月2日(土)～3日(月・祝)
 名古屋大学豊田講堂／ホール／アナトリウム／シンポジオン



「高校生ESDコンソーシアムIN愛知」 とは？

設立の背景：

- ・学校ごとの特色ある授業が多く展開されている
- ・生徒が自発的、積極的活動(部活動など)を行い成果を挙げている

しかしながら

- ・校内だけの活動に留まっている
- ・他校に広がりを見せない

・国立・公立・市立などの設置形態にとらわれることなく、多くの学校でコンソーシアムを作ることで、**生徒が主体となり、自らの学習内容や活動内容を他校の生徒を共有する。**



県立高等学校



市立高等学校



私立高等学校



国立高等学校



日程
 1日目(11月2日(日))

- 9:45～各校活動紹介 発表 【ホール】
 公立) 熱田高等学校、千種高等学校、豊田東高等学校、南陽高等学校
 私立) 中部大学第一高等学校、春日丘高等学校、金城学院高等学校、
 国立) 名古屋大学教育学部附属中・高等学校、




11:00～ ポスターセッション【アナトリウム】






13:00～ 高校生ESDワークショップ第1部
 【シンポジオン】






ESD
ワークショップ第3部
【ホール】

日程
2日目(11月3日(月・祝))
9:30～ 高校生ESD ワークショップ第2部【シンポジウム】
13:30～ 高校生ESD ワークショップ第3部【ホール】



国際理解チーム
気候・環境チーム
地域の文化財保護チーム

アクションプラン

- 気候・環境チーム
「ゴミのリサイクル・分別・節電節水」
- 国際理解チーム
「フェアトレード商品を買う、問題を伝える、活動の幅を広げる」
- 地域の文化財保護チーム
「カタチのないものの保護」

まとめ

- 他校との交流とESDへの理解を深めました。
- 各校でさらなる活躍を目指します。
- ESDに関する取り組みを継続していきます。(来年も開催予定)

